

んで袋の口をあけました。すると、
「ワン、ワン、ワン」

小さい白兔

小さい白兔が、たつた一人で住んで居ました。
兔のお家は、キャベツの畑のそばにありました。
毎朝お日様が窓からおのぞきなると、兔はとび
起きて、着物をきかへます、そして、「どれ、スー
プをこしらへるのにキャベツを取て来よう」と云
て出かけます。

或る日、兔はいつものように、帽子をかぶつて
籠を持って出かけましたが、大きなキャベツがみつ
かつたので、大急ぎで家へ歸て来ました。入口の
戸をあけようとすると、オヤ〜、戸があきませ
ん、そして中から鍵がかかつて居ます、兔はトン
トンコッ〜、一心になつてたたきました。する

と、犬が飛び出して一いきに狐をたべてしまひま
した。(ニラインランド)

と中から大きな聲で、「そこに居るのは誰だ。」と云
ひました。

「私は白兔です、今、畑へ行て、スープにする、
大きなキャベツを見つけて持て歸た處です」

と兔が答へました。すると家の中の大きな聲が、
「私は大きな強い山羊様だ。くづ〜してゐると
お前なんか、とびついて、三つに切て食べてや
る。」

と、どなりました。可哀さうな白兔は、びつくり
して逃げ出しました。途中で大きな牛に逢ひまし
たから、早速

「もし〜、牛さん、私は小さい白兔でございま

す。今朝私がスープを造らうと思つて、畑に行つて大きなキャベツを持つて歸ると、家の中には大きな強い山羊が居ました。そしてぐづくして居ると、飛びついて、三つに切つて食べてしまふつて、云ひました。後生だから、牛さん、助けて下さい」とたのみました。

牛は大きな山羊が怖いから、援ける事が出来ないと言ひました。しかたなしに兎は、どん／＼歩いて行きますと、直ちに黒犬に出逢ひました。兎は「もし／＼黒犬さん、私は小さい白兎です。今朝スープを造らうと思つて、畑に行つて、大きなキャベツを持つて歸ると私の家には大きな強い山羊が居ました。そして、ぐづくして居ると、飛びついて、三つに切つて食べてしまふて、食べてしまふつて、云ひました、後生だから、犬さん、私を援けて下さい」

とたのみました、けれど黒犬は、私は強い大きい山羊が怖いから援けられないと言ひました。又す

ん／＼歩いて行くうち、今度は赤い雄鶏にあひました。兎はまた。

「もし／＼赤い鶏さん、私は小さい白兎でございます、今朝スープを造らうと思つて畑に行きました、そして大きなキャベツを見つけて持つて歸ると、私の家には大きな強い山羊が居ました。そして、ぐづくして居ると、飛びついて、三つに切つて食べてしまふて、食べてしまふつて、云ひました、後生だから鶏さん、私を援けて下さい」とたのみました。

雄鶏も強い山羊が怖いから、援けることは出来ないといとこまりました。小さい白兎は、

「ああ、誰れも、お家から、あの強い山羊を、追ひ出すように援けてはくれない。どうしたらいいかしら、どこへ行たら、いいんだらう。」

と、小さい白兎は泣きながら歩いて行きました。すると耳の側で、

「お早う、小さい白兎さん、あなたは、何を泣い

て居るの」

と小さい聲がよびかけました。と、見るとそれは働きの蟻さんでした。

「まあ蟻さんでしたか、私、今朝スープを造らうと思つて、畑に行きました、そして大きなキヤベツを見つけて持て歸ると、私の家には、大きな強い山羊が居ました、そしてぐづぐづして居ると、飛びついて三つに切て食べてしまふつて食べてしまふつて、云ふのです」

と、兎の話すのを聞いて、働好きの蟻は、

「兎さん、そんなに心配しないでいい、私が一緒に行って、援けてあげませう」

と云て、二人で小さい白兎のお家へ行きました。

入口の戸をコツ／＼たたきますと、中から、太い聲が

「ここに居るのは、強い大きな山羊様だ、ぐづぐづしてゐるとお前なんか、飛びついて、三つに切て食べてやる」

と、どなりました。

「私は蟻です。小さい蟻ですけど何でも出来ますあなた知らない中に、はいて行て、チクリと刺すことも出来ますよ」と、云ひながら、蟻はしまつてゐる戸の鍵の穴から、スツと這つて行て山羊の背中をチクツと刺しました。

「あいたた、つ」

と云て、山羊は白兎の家からとび出して、一心に向の方へ逃げて行きました。それから小さい白兎さんは自分のお家へ這入つて、今朝とつて来たキヤツベツを切て、スープを造りました。

「さあ、蟻さんいらつしやい。おかげでありがたうございました」

とおいしいスープを食べて、それから二人で一緒に仲よく暮しました。

(ホルトガル)